

「親亡きあと、どうしたら」 募る不安



#ひきこもりのリアル
「8050」リスク

40～50代でひきこもり状態のきょうだいに、どう向き合おうか。実家から遠く離れて暮らしているも、「親亡きあと」を思えば切実だ。

KHJ全国ひきこもり家族会連合会（東京）では毎月、兄弟姉妹が対象のグループ相談会

⑥ 遠方に住むきょうだい

や、フリートークの「居場所」を開催している（現在は新型コロナウイルスの影響で休止中）。

「親に何かあったら、自分が代わりに生活を支えなければならぬのか」といった不安を抱えた人が多いという。

千葉県男性（38）は3年前から居場所に足を運ぶ。実家でひきこもり状態の2歳上の兄とは5年ほど前から会話がなく、「帰省しても顔を合わせず、自

分を避けているように感じる」と悩んだことがきっかけだ。

参加者同士で語り合うことで、「大変なのは自分だけじゃない」と少しずつ自分を客観視できるようになったという。

「今は焦らず兄に寄り添っていい」と考えています」と話す。担当するソーシャルワーカー（社会福祉士）の深谷守貞さんによると、民法上の兄弟姉妹の扶養義務は「自身が生活するの

NPO法人「てくてく」が開いている対話交流会
＝浜松市、同法人提供

一に考え、様々な社会制度を活用し、できる範囲で本人と関わってほしい」と呼びかける。

一方、ひきこもり状態の人は兄弟姉妹のことをどう思っているのか。深谷さんはある当事者が「自分の存在が邪魔だと考え、てしまうことがとても苦しい。

心の中では、きょうだいの幸せを願っていることを知ってほしい」と話していたことが印象に残っている。

各地の家族会や支援団体にも、兄弟姉妹からの相談が増えている。浜松市のNPO法人「てくてく」は昨年度、兄弟姉

妹から約50件の相談を受けた。

東京や横浜など静岡県外の人も多い。親が弱って実家が「8050問題」の状態になっているが、「自分にも仕事や家族があり、どうしたらいいかわからない」。そんな訴えが相次ぐ。離れていても、相談をきっか

けに孤立した家庭が把握でき、医療や福祉の専門機関につなぐこともできる。理事長の山本洋見さんはそう強調し「状況に合った支援先につながることを糸口にする。地域の家族会や支援団体に遠慮なく相談してほしい」と話す。（岡野翔、江口悟）